

# ドイツ語の *w* 感嘆文における動詞の位置とその意味論

伊藤 克将

## 要旨

In diesem Aufsatz geht es um die Verbstellung der deutschen *w*-Exklamativsätze. Während bei allen *w*-Exklamativsätzen die Verb-Letzt-Stellung (VL-Stellung) möglich ist, lassen einige *w*-Exklamativsätze nicht nur die VL-Stellung sondern auch die Verb-Zweit-Stellung (V2-Stellung) zu. Das Ziel dieser Arbeit ist es, zu erklären, warum solch ein Unterschied in den deutschen *w*-Exklamativsätzen vorliegt. Zuerst wird gezeigt, dass die *w*-Exklamativsätze, die sowohl mit der VL-Stellung als auch mit der V2-Stellung kompatibel sind, Graduierungsbedeutung haben. In der Literatur wird darauf hingewiesen, dass die V2-Stellung im Deutschen mit der Assertion einhergeht, während bei der VL-Stellung die Assertion fakultativ ist. Wenn man annimmt, dass die Graduierungsbedeutungen der *w*-Exklamativsätze assertiert sind, lässt sich die Verbstellung der *w*-Exklamativsätze erläutern: Die Assertiertheit der Graduierungsbedeutung lizenziert die V2-Stellung. Es wird aufgezeigt, dass diese Analyse durch das Verhalten der *w*-Exklamativsätze im Diskurs unterstützt wird.

**キーワード:** ドイツ語, 感嘆文, V2 現象, 主張 (assertion) と前提 (presupposition)

## 1. はじめに

いわゆる V2 言語 (verb-second language) であるドイツ語では、定動詞は主文においては第二位に、副文においては文末に置かれることが知られている<sup>1</sup>。例えば (1) では、主文の定動詞である *sagte* ‘said’ は第二位に置かれている一方、副文の定動詞である *ist* ‘is’ は文末に置かれている。

(1) Gestern **sagte** er, dass es draußen nicht sicher **ist**.

yesterday said he that it outside not safe is

昨日彼は、外は安全ではないと言った。

ところが、英語の *wh* 句にあたるドイツ語の *w* 句を用いた感嘆文 (*w* 感嘆文) では、(2) で示すように、主文にも関わらず定動詞の後置 (VL 語順 verb-last word order) が許され

る (cf. Fries 1988, Rosengren 1992, d'Avis 2013) <sup>2</sup>。

- (2) a. *Wie schön die getanzt hat!* (wie + 修飾語感嘆文)  
how beautifully she danced has  
彼女はなんてきれいに踊ったのだろう！
- b. *Was für ein tolles Auto der gekauft hat!* (was für ein 感嘆文)  
what for a nice car he bought has  
彼はなんて素晴らしい自動車を買ったのだろう！
- c. *Wen der kennt!* (wen 感嘆文)  
who he knows  
彼が知っている人には驚いたよ！
- d. *Wo der gewohnt hat!* (wo 感嘆文)  
where he lived has  
彼が住んでいた場所には驚いたよ！
- e. *Was der gemacht hat!* (was 感嘆文)  
what he made has  
彼がしたことには驚いたよ！

そして興味深いことに、これらの感嘆文のうちの一部は、主文にも関わらず定動詞第二位の語順 (V2 語順 verb-second word order) を受け付けない。(3) で示すように、*wie* + 修飾語感嘆文と *was für ein* 感嘆文では V2 語順が可能な一方、*wen* 感嘆文、*wo* 感嘆文、および *was* 感嘆文では、V2 語順が不可となっている (cf. Rosengren 1992: 282)。

- (3) a. *Wie schön hat die getanzt!*  
how beautifully has she danced  
彼女はなんてきれいに踊ったのだろう！
- b. *Was für ein tolles Auto hat der gekauft!*  
what for a nice car has he bought  
彼はなんて素晴らしい自動車を買ったのだろう！
- c. \**Wen kennt der!*  
who knows he
- d. \**Wo hat der gewohnt!*  
where has he lived
- e. \**Was hat der gemacht!*  
what has he made

本稿の目的は、ドイツ語の *w* 感嘆文における動詞の位置に関するこういった振る舞いについて、意味論的な観点から説明を与えることである。まず第2節で、(2) の *w* 感嘆文それぞれに見られる意味特徴を観察し、「ドイツ語の *w* 感嘆文では『程度 (degree)』の意味特徴を持つ場合に V2 語順が可能になる」という記述的一般化を行う。続く第3節で、ドイツ語の定動詞の位置に関する先行研究に基づき、VL 語順および V2 語順の、主張 (assertion) との関連を指摘する。VL 語順の副文と V2 語順の副文、それぞれの観察から明らかになるのは、VL 語順では主張が任意である一方、V2 語順では主張が強制されるということである。第4節では、ドイツ語の *w* 感嘆文の談話における振る舞いから、「程度」の意味が主張になっていることを示し、これによって感嘆文の V2 語順が認可されているとする提案を行う。第5節では、一見したところ例外と思われる現象である *alles* ‘all’ や *überall* ‘everywhere’ を伴う感嘆文を扱い、これらに関しても本稿の提案で捉えられる可能性を示す。第6節は結論である。

## 2. ドイツ語の *w* 感嘆文における程度 (degree) の意味特徴

Rett (2011) は英語の感嘆文に関して、「程度 (degree)」の意味を持つかどうかを基準に分類していくことを提案した。彼女は程度の意味を持つ感嘆文を *exclamative*、持たない感嘆文を *sentence exclamation* と呼び、区別している。「程度の意味を持つ」とは、感嘆文がその真理条件として、ある要素の程度が (発話時のコンテキストに照らし合わせて) 極めて高いことを要求しているということである。これらの違いは、程度の意味を読み込むことができない場合、すなわち特定のスケールにおけるある要素の程度の高さがコンテキストにおいて保証されていない場合に、その感嘆文が発話可能かどうかでテストすることができる。例えば、(4) のようなコンテキストにおいては、(4a) は不適切な発話である一方、(4b) は発話可能である (cf. Rett 2011: 418)。

(4) コンテキスト:

Mary は John がかぼちゃパイとクリームブリュレを作ると聞いていたが、実際には John はチョコレートケーキとブルーベリーパイを作った。Mary はチョコレートケーキとブルーベリーパイをあくまで普通のお菓子と考えているが、John がこの二つを作るとは予想だになかったので驚いた。

a. #What desserts John baked!

b. (Wow,) John baked those desserts!

(4) では Mary がチョコレートケーキとブルーベリーパイに関して「極めて{良い/悪い}」などの程度を伴った評価を下していないため、コンテキストとしては「程度なし」となる。そしてそのコンテキストで発話できない (4a) のような感嘆文は「程度」の意味を

真理条件として持つ一方、(4b) のような感嘆文は「程度」の意味を真理条件として義務的には持たないと考えられるのである。

それでは、「程度」の意味特徴を真理条件として持つかどうかでドイツ語の *w* 感嘆文を分類していくと、どのような結果が得られるだろうか。まず (2a) の *wie*+修飾語感嘆文 (5a として再掲) だが、この種の感嘆文では形容詞や副詞といった修飾語が程度要素となるため、性質に関する「程度」の意味特徴を必ず持つと考えられる。例えば (5a) では *wie schön* ‘how beautifully’ によって「美しさ」の程度が、(5b) では *wie groß* ‘how tall’ によって「大きさ」の程度が、それぞれ極めて高いことが表現されている。

- (5) a. *Wie schön die getanzt hat!*  
how beautifully she danced has  
彼女はなんてきれいに踊ったのだろう！
- b. *Wie groß du geworden bist!*  
how tall you become are  
君はなんて大きくなったのだ！

続いて (2b) の *was für ein* 感嘆文 (6a として再掲) だが、こちらは *wie*+修飾語感嘆文とは異なり、程度要素となる修飾語は義務的に現れるわけではない。(6a) では *toll* ‘nice’ という形容詞が程度要素となっているものの、(6b) では特にそういった要素は現れていない。

- (6) a. *Was für ein tolles Auto der gekauft hat!*  
what for a nice car he bought has  
彼はなんて素晴らしい自動車を買ったのだろう！
- b. *Was für einen Arzt ich getroffen habe!*  
what for a doctor I met have  
私はなんて医者に会ったのだろう！

とはいえ、(6b) のように形容詞や副詞を伴わない場合でも、ある特定のスケールに置ける「程度」の高さが保証されていないコンテキストでは、(7a) で示すように *was für ein* 感嘆文の発話は不適切となる。

- (7) コンテキスト：  
話者が医者を訪れたところ、その医者は知り合いの **Peter** だった。話者は **Peter** が医者であることを知っており、また **Peter** のことをあくまで普通の医者だと考えてい

るが、まさかこのような形で Peter に会うとは思っていなかったので驚いた。

a. #Was für einen Arzt ich getroffen habe!

what for a doctor I met have

b. Wen ich getroffen habe!

who I met have

(7) では話者が Peter に関して程度を伴った評価を下していないため、「程度なし」のコンテキストになっていると考えられる。この例における話者の驚きの要因は、程度の極端さにあるのではなく、「自分が訪れた医者が偶然にも Peter だった」という事実に対する意外さにあるのである。こういったコンテキストでは発話できない *was für ein* 感嘆文は、形容詞や副詞を伴っていても、*wie*+修飾語感嘆文と同様に「程度」の意味特徴を真理条件として持っていると言える。

さて、(7) において興味深いのは、(7b) が示しているように *wen* 感嘆文は「程度」なしのコンテキストでも適切な発話になるという点だ。これはすなわち、*wen* 感嘆文は「程度」の意味を真理条件としては持たないことを示唆していると言えよう。これと同様のことは、*wo* 感嘆文 (2d) および *was* 感嘆文 (2e) にも当てはまる。(8b) および (9b) が示しているように、*wo* 感嘆文および *was* 感嘆文は、(8a) (9a) の *was für ein* 感嘆文とは異なり、「程度」なしのコンテキスト、すなわち、ある特定のスケールに置ける「程度」の高さが保証されていないコンテキストでも発話することが可能である。

(8) コンテキスト :

話者は Peter がベルリンかミュンヘンを訪れたと思っていたが、実際には Peter は東京を訪れたことを知った。話者は東京をベルリンやミュンヘンとあくまで同列に考えているが、Peter が東京を訪れたとは予想だにできなかったので驚いた。

a. #Was für eine Stadt Peter besucht hat!

what for a city Peter visited has

b. Wo Peter gewesen ist!

where Peter been is

(9) コンテキスト :

話者は Peter がビールかワインを飲むと思っていたが、実際には Peter は水を飲んでいた。話者は水を飲み物としてはビールやワインとあくまで同列に考えているが、Peter が水を飲んでいるとは予想だにできなかったので驚いた。

a. #Was für ein Getränk Peter trinkt!

what for a beverage Peter drinks

b. Was Peter trinkt!  
what Peter drinks

(8) では話者が東京に関して「程度」を伴った評価を下しておらず、(9) では水に関して「程度」を伴った評価を下していない。よってこれらのコンテキストは「程度」なしと考えられる。そしてこれらのコンテキストにおいて *wo* 感嘆文および *was* 感嘆文が発話可能であることは、いずれの感嘆文も「程度」の意味を真理条件として義務的には持たないことを示している。

さて、第1節の (2) および (3) において我々は、*wie* + 修飾語感嘆文と *was für ein* 感嘆文では VL 語順・V2 語順がともに許される一方、*wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文では VL 語順のみが許されることをみた。そして本節の議論から明らかになったのは、*wie* + 修飾語感嘆文と *was für ein* 感嘆文は「程度」の意味を真理条件として持つ一方、*wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文は「程度」の意味を真理条件として義務的には持たないということである。すると記述的一般化として、(10) が成り立つ。

- (10) 「程度」の意味を真理条件として持つ *w* 感嘆文は VL・V2 語順ともに許す一方、「程度」の意味を真理条件として持たない *w* 感嘆文は VL 語順のみを許す。

なお、*wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文は、それぞれ例えば「極めて優れた人物に出会って驚いた」「極めて治安の悪い都市に行って驚いた」「極めてアルコールの強い飲み物を飲んで驚いた」などの、「程度」ありのコンテキストでも発話可能であるが、この場合も V2 語順を許さない。(7) ~ (9) で見たように *wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文は『程度』の意味を真理条件として持たない *w* 感嘆文であるため、(10) の一般化はこの事実に関しても正確に捉えていると言えよう。

さて、(10) のような一般化だが、あくまで記述に過ぎず、そもそもなぜ成り立つのか、という疑問が残る。そこで次節以降では、ドイツ語の VL 語順・V2 語順の意味論を検討し、(10) が成り立つ背景を探っていく。

### 3. ドイツ語における VL 語順・V2 語順と主張 (assertion) の関係

ドイツ語では文の命題が主張 (assertion) となっているときには V2 語順が可能になることが、多くの先行研究で指摘されている (Reis 1997, Lohnstein 2000, Meinunger 2004, Truckenbrodt 2006, Antotmo & Steinbach 2010, Reis 2013 など)。主張の定義に関しては様々な立場がある (cf. Murray 2010: 89) が、本稿では主張とは「聞き手に対し、ある命題を信じることを提案すること」であるとする。

さて、ドイツ語において主張が V2 語順を認可していることを示す典型的な例として

は、補文における動詞の位置が挙げられる。主文の動詞が *denken* ‘think’ である (11) では VL 語順 (11a) も V2 語順 (11b) も可能である一方、主文の動詞が *bereuen* ‘regret’ である (12) では、VL 語順 (12a) のみが可能で、V2 語順 (12b) は許されない。これは、*denken* ‘think’ に埋め込まれている補文は主張となることができる一方で、*bereuen* ‘regret’ に埋め込まれている補文は前提 (presupposition) となっているがゆえに主張にはなり得ないため、(12b) において V2 語順が不可になっていると考えることができる。

(11) a. Ich denke, dass er Recht **hat**.

I think that he right has  
私は、彼が正しいと思う。

b. Ich denke, er **hat** Recht.

I think he has right  
私は、彼が正しいと思う。

(12) a. Ich bereue, dass ich es gegessen **habe**.

I regret that I it eaten have  
私は、それを食べたことを後悔している。

b. \*Ich bereue, ich **habe** es gegessen.

I regret I have it eaten

ここで注意しておきたいのは、V2 語順は主張のために必ず必要というわけではなく、VL 語順であっても文の命題が主張されることは可能であるということだ。すなわち、主張は V2 語順のための必要条件ではあるが、十分条件ではないのである。このことを示すデータとして、(13) が挙げられる。

(13) a. Bist du nervös? Weil du schon deine dritte Zigarette **rauchst**.

are you nervous because you already your third cigarette smoke  
不安なの？だって君もう 3 本目のタバコを吸っているんだもん。

b. Bist du nervös? Weil du **rauchst** schon deine dritte Zigarette.

are you nervous because you smoke already your third cigarette  
不安なの？だって君もう 3 本目のタバコを吸っているんだもん。

(Antomo & Steinbach 2010: 19、グロスおよび訳は筆者による)

VL 語順の (13a) においても、V2 語順の (13b) においても、*weil* ‘because’ 文の命題は主張されている。すなわち、これらの *weil* ‘because’ 文は疑問の一部とはなっておらず、第一文の疑問文とは独立して、*weil* ‘because’ 文が単独で「君がもう 3 本目のタバコ

を吸っているからこの質問をした」という主張を行っているのである。(13a) のように VL 語順であってもこういった用法が可能であることは、VL 語順であっても文の命題が主張されることは可能であることを示している。

一方 V2 語順に関しては、(12) でみたように文による主張がなされていなければ認可されない。このことは、*weil* ‘because’ 文においても観察される (14)。

- (14) a. Bist du mir böse, weil ich gestern nicht bei deinem Vortrag war?  
are you to-me mean because I yesterday not at your talk was  
僕が昨日の君の発表に行かなかったから、君は僕に対して怒っているの？
- b. #Bist du mir böse, weil ich war gestern nicht bei deinem Vortrag?  
are you to-me mean because I was yesterday not at your talk
- (Antomo & Steinbach 2010: 7、グロスおよび訳は筆者による)

(14) において意図されている読みにおいては、*weil* ‘because’ 文は疑問の一部となっており、主張はなされていない。よって VL 語順 (14a) のみが可能で、V2 語順 (14b) は不適切となっているのである<sup>3</sup>。

さて、主張によって V2 語順が認可されるというドイツ語の性質を鑑みたくて、改めて *w* 感嘆文における動詞の位置を考察してみよう。第 2 節で確認されたのは、「程度」の意味を真理条件として持つ *w* 感嘆文のみが V2 語順を受け付けるということである。すると、「程度」の意味を真理条件として持つ *w* 感嘆文では主張がなされておりそれが V2 語順を認可している一方、「程度」の意味を真理条件として持たない *w* 感嘆文では主張がなされていないため V2 語順が認可されない、と考えることが可能である。そこで本稿では、仮説として (15) を提案したい。

- (15) 「程度」の意味を真理条件として持つ感嘆文で V2 語順が可能であるのは、  
「程度」の意味が主張されているからである。

この仮説が正しければ、「程度」の意味を真理条件として持つ *w* 感嘆文において V2 語順が可能である理由に関して、「主張によって V2 語順が認可されているから」という、より一般的な説明が可能になる。そこで次節では、感嘆文における主張と前提を確認したうえで、(15) を裏付ける現象を観察していく。

#### 4. 感嘆文における主張 (assertion) と前提 (presupposition)

感嘆文はある事態を踏まえて発話されることから、感嘆文の命題は前提 (presupposition) になっているとしてしばしば扱われる (Zanuttini & Portner 2003, Abels



2010、Driemel 2015 など)。前提の定義に関しても、主張と同様、様々な立場がある (cf. von Stechow 2008) が、本稿では前提とは「話し手と聞き手が共有している情報であるもの」とする。

さて、前提を検出するテストとしてよく知られているのは、いわゆる前提投射 (presupposition projection) に関わる現象である (cf. Karttunen 1973、Abels 2010)。前提を引き起こす要素 (presupposition trigger) の代表的な例として確定記述 (definite description) があり、例えば (16) では *the alien* という確定記述によって、「エイリアンが存在すること」が前提となる。

(16) **The alien** is in the kitchen.

しかしながら、確定記述が埋め込まれた場合、それによる前提は常に保持されるとは限らない。たとえば (17a) においてはエイリアンの存在は前提となっているものの、(17b) ではエイリアンの存在は (John によって信じられてはいるものの) 話し手と聞き手の間での前提とはなっていない。また (17c) ではエイリアンの存在が前提となっている一方で、(17d) では前提とはなっていない。Karttunen (1973) は (17a) の *be surprised* のように前提を引き継ぐ表現を穴 (hole)、(17b) の *believe* のように前提を引き継がない表現を栓 (plug)、(17c, d) の *if* のように前提を引き継ぐ場合とそうでない場合がある表現をフィルター (filter) と呼んでいる。

(17) a. John is surprised that **the alien** is in the kitchen.

b. John believes that **the alien** is in the kitchen.

c. If you want to become famous, you have to lure **the alien** into your kitchen.

d. If you want to catch an alien, you have to lure **the alien** into your kitchen.

ドイツ語の *w* 感嘆文の命題に関しても確定記述と同じ振る舞いが観察されるのであれば、*w* 感嘆文の命題は前提になっているとすることができるかもしれない。すなわち、感嘆文の命題の事実性が穴 (hole) によって引き継がれ、栓 (plug) によっては引き継がれず、フィルター (filter) によっては引き継がれる場合とそうでない場合がある場合とすれば、感嘆文の命題は前提であると言えることができるであろう。しかしながら、感嘆文を埋め込んだ場合にも、それが主文として使われる感嘆文と同じ性質を有しているかどうかには疑問が残る。たとえば (18a) の感嘆文は (18b) のように埋め込むことが可能だが、ここでは感嘆文ではなく間接疑問文として解釈されている。

(18) a. Wie schön sie ist!

how beautiful she is

彼女はなんて美しいのだろう！

b. Peter weiß, wie schön sie ist.

Peter knows how beautiful she is

ピーターは彼女がどれくらい美しいのか知っている。

よって、ドイツ語の *w* 感嘆文において前提投射に関する振り舞いを確認することは極めて困難だと思われる。(18b) のように埋め込まれた形が感嘆文であると断言できない以上、そもそもテストできているのかが不確かになってしまうからである。

さて、先ほど前提の定義は「話し手と聞き手が共有している情報であるもの」だとした。話し手と聞き手が共有する情報である以上、前提は談話において、容易には否定されないと考えられる。一方、主張の定義は「聞き手に対し、ある命題を信じることを提案すること」だとした。提案である以上、否定によってその提案を拒否することは比較的容易に行えると思われる。そして事実、主張されている内容は (19) のように談話の中で *No* による否定が可能である一方で、(20) のように前提を *No* によって否定すると比較的 unnatural な発話となる。前提を否定する場合、*B'* のように *Hey, wait a minute!* などの、会話の流れを一旦止める表現を使った方が *B* よりも自然な発話となる (cf. von Fintel 2004, Rett 2011)。

(19) A: The alien is in the kitchen.

B: No, it is not in the kitchen.

(20) A: The alien is in the kitchen.

B: ?#No, there is no alien.

B' : Hey, wait a minute! There is no alien.

それでは、これを主張と前提を検出するテストと考え、ドイツ語の *w* 感嘆文に適用してみよう。まず、(21A) のような *wie* + 修飾語感嘆文を見る。この感嘆文が発話された場合、(21B) のように、「極めて美しかった」という「程度」の意味は聞き手によって否定されうる一方、(21B') のように、「彼女が踊った」ことの *Nein* 'no' を用いての否定は、*Warte mal* 'wait a minute' を用いての否定 (21B'') と比べると比較的 unnatural な発話となる。

(21) A: Wie schön sie getanzt hat! / Wie schön hat sie getanzt hat!

how beautifully she danced has how beautifully has she danced has

彼女はなんてきれいに踊ったのだろう！

B: Nein, das war nicht so schön.

no that was not so beautiful

いや、そんなきれいじゃなかったよ。

B’: ?#Nein, sie hat nicht getanzt.

no she has not danced

いや、彼女は踊ってないよ。

B’’: Warte mal! Sie hat nicht getanzt.

wait once she has not danced

ちょっと待って！彼女は踊ってないよ。

このことは、「程度」の意味に関しては主張になっている一方で、「彼女が踊った」ことは前提になっているということを示唆していると言えよう。

続いて *was für ein* 感嘆文を見る。(22A) のような感嘆文が発話された場合、(22B) が示しているように、「極めて素晴らしい」という「程度」の意味は聞き手によって否定されることができる。一方で、(22B’) のように「彼が自動車を買った」という命題を *Nein* ‘no’ を用いて否定した場合、*Warte mal* ‘wait a minute’ を用いて否定 (22B’’) した場合と比べると比較的不自然な発話となる。

(22) A: Was für ein tolles Auto der gekauft hat! / Was für ein tolles Auto hat der gekauft!

what for a nice car he bought has what for a nice car has he bought

彼はなんて素晴らしい自動車を買ったのだろう！

B: Nein, das ist nicht so toll.

no that is not so nice

いや、そんなに素晴らしくないよ。

B’: ?#Nein, er hat kein Auto gekauft.

no he has no car bought

いや、彼は自動車を買ってないよ。

B’’: Warte mal! Er hat kein Auto gekauft.

wait once he has no car bought

ちょっと待って！彼は自動車を買ってないよ。

このデータも、*wie* + 修飾語感嘆文と同様、*was für ein* 感嘆文では「程度」の意味に関しては主張になっていることを示唆していると言えよう。(22A) の感嘆文において前提となっているのは「彼が自動車を買った」という「程度」の意味を含まない命題である一

方で、「極めて素晴らしい」という「程度」の意味に関しては主張されていることが、(22B)と(22B')および(22B'')の対比から伺える。

さて、それではV2語順を許さないw感嘆文に、談話における否定を用いたテストを適用した場合は、どのような結果が得られるだろうか。(23)から(25)までに、それぞれwen感嘆文・wo感嘆文・was感嘆文にこのテストを適用した結果を示す。

(23) A: Wen Peter getroffen hat!

who Peter met has

ペーターが会った人には驚いたよ!

B: ?#Nein, Peter hat niemanden getroffen.

no Peter has nobody met

いや、ペーターは誰にも会ってないよ。

B': Warte mal! Peter hat niemanden getroffen.

wait once Peter has nobody met

ちょっと待って! ペーターは誰にも会ってないよ。

(24) A: Wo Peter gegangen ist!

where Peter gone is

ペーターが行った場所には驚いたよ!

B: ?#Nein, Peter ist nirgendwo gegangen.

no Peter is nowhere gone

いや、ペーターはどこにも行ってないよ。

B': Warte mal! Peter ist nirgendwo gegangen.

wait once Peter ist nowhere gegangen

ちょっと待って! ペーターはどこにも行ってないよ。

(25) A: Was Peter gemacht hat!

what Peter made has

彼がしたことには驚いたよ!

B: ?#Nein, Peter hat nichts gemacht.

no Peter has nothing made

いや、ペーターは何もしてないよ。

B': Warte mal! Peter hat nichts gemacht.

wait once Peter has nothing made

ちょっと待って! ペーターは何もしてないよ。

(23) から (25) における感嘆文の *w* 句が変項 (variable) であるとする、考えられる命題はそれぞれ「私は *x* に会った」「彼は *x* にいた」「彼は *x* をした」となるが、これらの命題は (23) から (25) の *B* が示しているように談話の中で *Nein* ‘no’ を用いて否定すると、*B*’のように *Warte mal* ‘wait a minute’ を用いて否定するよりも比較的不自然な発話となる。よってこれらの感嘆文の命題は主張ではなく、前提になっていると考えられる。主張されている要素がないがゆえに、V2 語順も認可されないのであろう。しかしながら、感嘆文の発話が行われているにもかかわらず、何も主張されていないなどということが有り得るのだろうか。考えられる一つの可能性は、ある命題が話者にとって驚きであることを感嘆文は主張している、というものである。しかしながら、感嘆文の発話に対し、その命題が話者にとって驚きであることを聞き手が否定することはできないことが知られている<sup>4</sup> (cf. Chernilovskaya et al. 2012: 115)。よって (23) から (25) のような程度の意味を真理条件として持っていない感嘆文は、程度の意味を真理条件として持っている感嘆文とは異なり、主張を行っておらずそれとは別の発話力 (speech act) を持っているのが妥当であろう。おそらくは表明 (expression) であると思われるが、これを具体的にどう定式化するかは今後の課題である。

以上本節では、V2 語順を許す感嘆文 (*wie* + 修飾語感嘆文と *was für ein* 感嘆文) では「程度」の意味が主張となっている一方、V2 語順を許さない感嘆文 (*wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文) は「程度」の意味を真理条件としては含んでおらず命題が前提になっていることを経験的に示し、(15) の仮説を支持した。

次節では、一見したところ本稿での提案にとって例外と思われる現象を扱い、(15) の分析で捉えられる可能性を示す。

## 5. 例外と思われる現象—*alles* や *überall* を伴う *w* 感嘆文

さて、前節で *wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文は「程度」の意味を含んでおらず主張がなされていないがために V2 語順を許さないとした。しかしながら、これらの感嘆文は *alles* ‘all’ や *überall* ‘everywhere’ を伴った場合、V2 語順が可能となる (cf. Fujinawa 2011)。

(26) a. *Wen kennt der alles!* / *Wen der alles kennt!*

who knows he all    who he all    knows

彼はまあ誰でも知っているんだね!

b. *Wo ist die doch überall gewesen!* / *Wo die doch überall gewesen ist!*

where is she PART everywhere been    where she PART everywhere been    is

彼女はまあどこにでも行ったことがあるんだね!

c. Was **hat** der alles gemacht! / Was der alles gemacht **hat**!

what has he all made what he all made has

彼はまあ何でもやってしまうんだね！

それでは、これらの感嘆文に関しては本稿の分析では扱えないのだろうか。ここで考えたいのは、*alles* ‘all’ や *überall* ‘everywhere’ を伴った場合は *wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文も「程度」の意味を持つことになる、という可能性だ。実際、これらの感嘆文が自然な発話となるのは、(27) から (29) のような量に関する「程度」が高いことが保証されているコンテキストにおいてである。

(27) コンテキスト：

話者があるパーティーに参加したところ、会った人の人数が極めて多いことに驚いた。

Wen ich alles getroffen habe! / Wen habe ich alles getroffen!

who I all met have who have I all met

(28) コンテキスト：

話者は、Peter の行ったことのある場所の数が極めて多いことに驚いた。

Wo Peter überall gewesen ist! / Wo ist Peter überall gewesen!

where Peter everywhere been is where is Peter everywhere been

(29) コンテキスト：

話者は、Peter が飲む飲み物の種類が極めて多いことに驚いた。

Was Peter alles trinkt! / Was trinkt Peter alles!

what Peter all drinks what drinks Peter all

そして興味深いことに、*alles* ‘all’ や *überall* ‘everywhere’ を伴った感嘆文は、(30) から (32) のような、量の程度が高いことが保証されていないコンテキストでは不自然となる。

(30) コンテキスト：

話者が医者を訪れたところ、その医者は知り合いの Peter だった。話者は Peter が医者であることを知っており、また Peter のことをあくまで普通の医者だと考えているが、まさかこのような形で Peter に会うとは思っていなかったのに驚いた。

#Wen ich alles getroffen habe! / #Wen habe ich alles getroffen!

who I all met have who have I all met

(31) コンテキスト :

話者は Peter がベルリンかミュンヘンを訪れたと思っていたが、実際には Peter は東京を訪れたことを知った。話者は東京をベルリンやミュンヘンとあくまで同列に考えているが、Peter が東京を訪れたとは予想だにできなかったのが驚いた。

#Wo Peter überall gewesen ist! / #Wo ist Peter überall gewesen!  
where Peter everywhere been is where is Peter everywhere been

(32) コンテキスト :

話者は Peter がビールかワインを飲むと思っていたが、実際には Peter は水を飲んでいた。話者は水を飲み物としてはビールやワインとあくまで同列に考えているが、Peter が水を飲んでいるとは予想だにできなかったのが驚いた。

#Was Peter alles trinkt! / #Was trinkt Peter alles!  
what Peter all drinks what drinks Peter all

これらのデータが示唆しているのは、*wen* 感嘆文・*wo* 感嘆文・*was* 感嘆文も *alles* ‘all’ や *überall* ‘everywhere’ を伴った場合は「程度」の意味を持つということだ。おそらく、量に関する「程度」の意味が V2 語順を認可していると思われる。よって、これらについても今回の分析で捉えられる可能性は充分にあると言えるだろう。とはいえ、この種の感嘆文においてどのように主張と前提を検出するかや、そもそもなぜ *w* 句と *alles* ‘all’ が分離しているかなどは不明であり、さらなる検討が必要である。これらの点に関しては今後の課題としたい。

## 6. おわりに

以上本稿では、ドイツ語の *w* 感嘆文の動詞の位置に関して、意味論的な観点から説明を試みた。まず記述的一般化として、ドイツ語の *w* 感嘆文は「程度」の意味を真理条件として持っている場合に V2 語順が可能になることを示した。さらに、V2 語順を許す感嘆文では「程度」の意味が主張されており、それによって V2 語順が認可されているということが明らかになった。本稿では、談話の中での否定という観点において主張と前提の検出を試みたが、これによって感嘆文の主張と前提を完全に捉えられているかどうかは定かではない。「主張」や「前提」という概念のより精緻な定義や、それらを検出する多様なテストが必要であろう。4 節および 5 節の最後に述べたことと合わせ、これらの点は今後の課題である。

## 謝辞

本稿は、2017 年 5 月 27 日に日本大学文理学部で開催された日本独文学会 2017 年春季

研究発表会での口頭発表に基づくものである。その際に貴重なコメントをくださった参加者の方々、および本誌の匿名の査読者に心から感謝したい。また、口頭発表および本稿執筆の前後において、森芳樹、岡野伸哉、山崎祐人、林則序の各氏との議論が非常に有益であった。なお、本稿に誤りがあればそれらはすべて執筆者の責任であることは言を俟たない。本研究は、JSPS 科研費（課題番号：16J08572）による助成を受けている。

## 註

- 1 「主文」はドイツ語の *Hauptsatz*、「副文」はドイツ語の *Nebensatz* の訳語である。なお、本稿では「文」という表現をドイツ語の *Satz* の意味で用い、その指示対象に副文（いわゆる従属節）も含める。
- 2 ドイツ語の *w* 感嘆文には (1) の他にも、修飾語を伴わない *wie* ‘how’ を用いた感嘆文や、*warum* ‘why’ や *welch* ‘which’ を用いた感嘆文などが存在するが、これらについては今後の課題とし、本稿では扱わないものとする。
- 3 (14b) では、「僕が昨日の君の発表に行かなかったからこの質問をするのだが、君は怒っているの？」という読みならば可能である。
- 4 匿名の査読者より、(23A) によって主張されている可能性があるのは「驚きである」という部分ではなく、「会った人は予想外の人であった」という部分ではないかというご指摘を頂いた。しかしながら、(23A) の発話に対して *Nein, die Person war erwartet.* ‘No, the person was expected.’ と返答することはやはり不自然な発話となるため、この部分に関しても主張はされていないと考えられる。
- 5 驚きの表明という発話力が、「程度」の意味が主張されており V2 語順を許す感嘆文においても備わっているかどうかに関しては今後の課題である。私見では、これらの感嘆文の発話力はあくまで主張であり、表明は語用論で読み込まれる二次的な発話力（secondary speech-act, cf. Zimmermann 2011: 2028）であるが、これについてはさらなる検討が必要であろう。

## 参考文献

- Abels, Klaus. (2010). Factivity in exclamatives is a presupposition. *Studia Linguistica*, 64, 141–157.
- Antomo, Mailin. & Steinbach, Markus. (2010). Desintegration und Interpretation: Weil-V2-Sätze an der Schnittstelle zwischen Syntax, Semantik und Pragmatik. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 29, 1–37.
- d’Avis, Franz. (2013). Exklamativsatz. In: Meibauer, J., Steinbach, M. & Altmann, H. (eds.), *Satztypen des Deutschen*, 170–202. de Gruyter.
- Chernilovskaya, Anna., Condoravdi, Cleo., & Lauer, Sven. (2012). On the discourse effects of wh-exclamatives. *Proceedings of the 30th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 109–119.
- Driemel, Imke. (2015). Exclamatives and Factivity: A new test based on VERUM Focus. *Proceedings of ConSOLE XXIII*, 406–426.



- Fries, Norbert. (1988). Ist Pragmatik schwer!—Über sogenannte ‚Exklamativsätze‘ im Deutschen. *Sprache und Pragmatik*, 3, 1–18.
- von Fintel, Kai. (2004). Would you believe it? The king of France is back! Presuppositions and truth-value intuitions. In: Reimer, M. & A. Bezuidenhout (eds.), *Descriptions and Beyond*, 269–296. Oxford University Press.
- von Fintel, Kai. (2008). What is presupposition accommodation, again? *Philosophical Perspectives*, 22(1), 137–170.
- Fujinawa, Yasuhiro. (2011). Wo sich Synchronie und Diachronie überschneiden: Eine (Rand-)Bemerkung zur Verbstellung im Gegenwartsdeutsch. In: Kotin, M. L. & Kotorova, E. G. (eds.), *Geschichte und Typologie der Sprachsysteme*, 129–138. Winter Verlag.
- Karttunen, Lauri. (1973). Presuppositions of compound sentences. *Linguistic Inquiry*, 4, 167–193.
- Lohnstein, Horst. (2000). Satzmodus—kompositionell. Akademie Verlag.
- Meinunger, André. (2004). Verb position, verbal mood and the anchoring (potential) of sentences. In: Lohnstein, H. & Trissler, L. (eds.), *The Syntax and Semantics of the Left Periphery*, 313–341. de Gruyter.
- Murray, Sarah. (2010). *Evidentiality and the structure of speech acts*. Ph.D. dissertation, Rutgers University.
- Reis, Marga. (2013). „Weil-V2“-Sätze und (k)ein Ende? Anmerkungen zur Analyse von Antomo & Steinbach (2010). *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 32, 221–262.
- Reis, Marga. (1997). Zum syntaktischen Status unselbständiger Verbzweit-Sätze. In: Dürscheid, C., Ramers, K. H. & Schwarz, M. (eds.), *Sprache im Fokus. Festschrift für Heinz Vater zum 65. Geburtstag*, 121–144. Niemeyer.
- Rett, Jessica. (2011). Exclamatives, degrees and speech acts. *Linguistics and Philosophy*, 34(5), 411–442.
- Rosengren, Inger. (1992). Zur Grammatik und Pragmatik der Exklamation. In: Rosengren, I. (ed.), *Satz und Illokution, Bd. 1*, 263–306. Niemeyer.
- Truckenbrodt, Hubert. (2006). On the semantic motivation of syntactic verb movement to C in German. *Theoretical Linguistics*, 32, 257–306.
- Zanuttini, Raffaella. & Portner, Paul. (2003). Exclamative clauses: At the syntax-semantics interface. *Language*, 79(1), 39–81.
- Zimmermann, Malte. (2011). Discourse particles. In: Maienborn, C., von Stechow, K. & Portner, P. (eds.), *Semantics: An International Handbook of Natural Language Meaning, Volume 2*, 2011–2038. de Gruyter.

